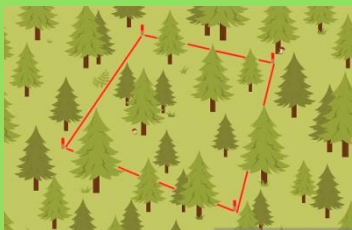
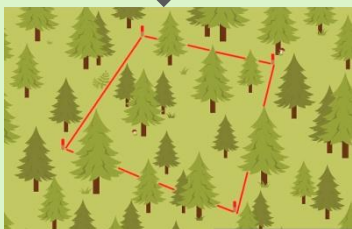


モニタリングのパターン（１）

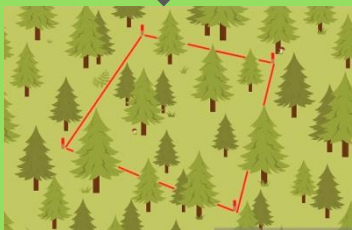
初回調査



1年目



2年目



3年目



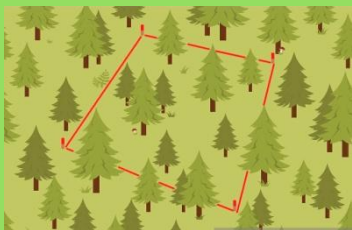
毎年、同じ調査区で定点調査をするパターンです。

例：目標対象種の成立本数、ぼう芽の本数など

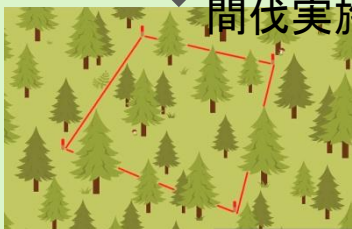
ただし、植栽や天然更新のためのササ刈りなどを実施する場所が、年度ごとに移動する場合は、次ページの毎年調査区を設定するパターンになります。

モニタリングのパターン（２）

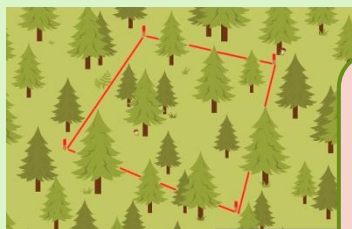
初回調査



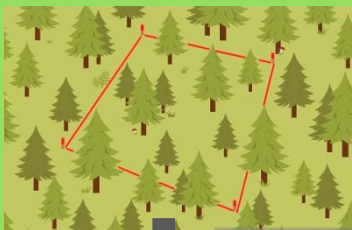
1年目



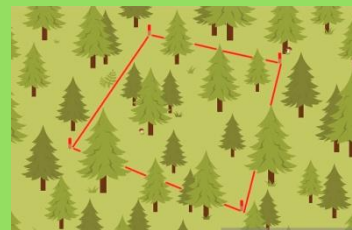
間伐実施



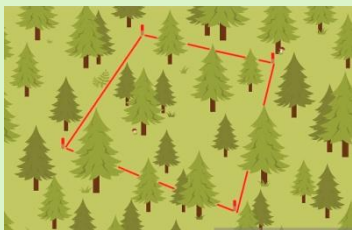
2年目



間伐実施



3年目



間伐実施

毎年、新たな調査区を設定するパターンです。
例：毎年場所を変えて間伐をする場合など

3年目には、すべての調査区を調査します。

その年に作業を行わない森林の面積は、交付金の申請面積に算入できませんので、ご注意ください。
「モニタリング調査のガイドライン」
p.11参照

モニタリングのパターン（3）

初回調査

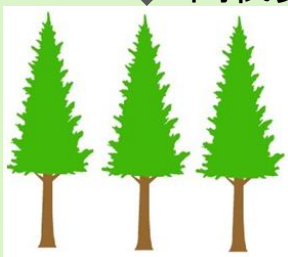
現状: $Sr=O$
数値目標: $Sr=\square$



間伐実施

1年目

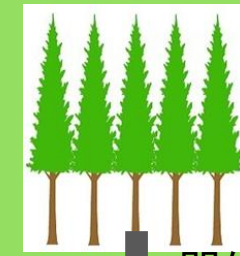
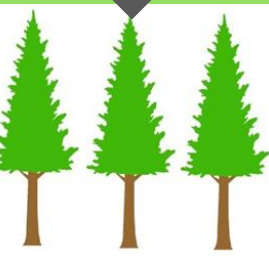
数値目標を
達成した森林
全体の○%



間伐実施

2年目

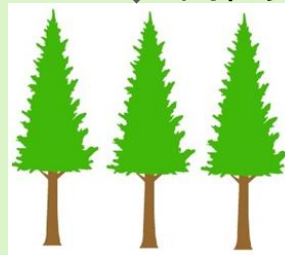
数値目標を
達成した森林
全体の○%



間伐実施

3年目

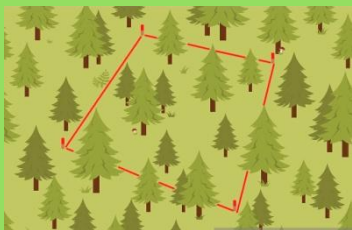
数値目標を
達成した森林
全体の○%



その年に作業を行わない森林の面積は、
交付金の申請面積に
算入できませんので、
ご注意ください。
「モニタリング調査
のガイドライン」
p.11参照

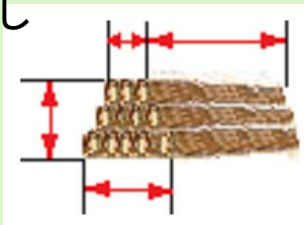
モニタリングのパターン（４）

初回調査



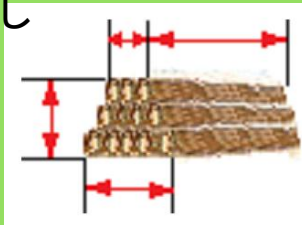
1年目

原木伐り出し



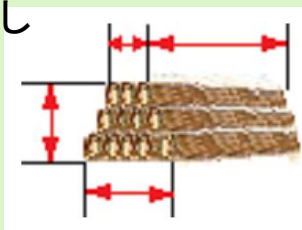
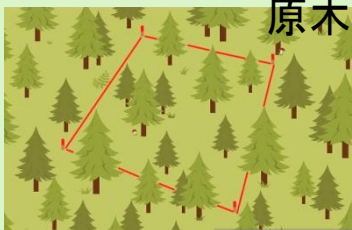
2年目

原木伐り出し



3年目

原木伐り出し



初回調査とモニタリングの調査が異なるタイプです。
例：資源利用タイプ

3年目には森林の状況を確認するため、初回と同じ調査を実施します。

数値目標の設定

3年後の数値目標は必ず設定します。
増える目標、維持する目標、減っていく目標などがあります。
活動の目的に応じた数値目標を設定しましょう。

増える目標

相対幹距比—間伐を実施すれば増加します。

植栽木の生立本数—無立木地に植栽すれば、皆増です。過去の植栽地を保育・手入れしていく場合は維持する目標になります。ただし、枯死する苗木が出て、減少することもあり得ます。

維持する目標

資源の利用量—安定して採取・利用を続ける場合は維持する目標、採取量増加のために森林整備などを行う場合は増える目標になります。

減少する目標

胸高断面積—間伐を実施して林内照度を改善すると減少しますが、その後樹木が生長すると再び増加します。

倒木、危険木、枯損木の本数
ササの侵入率など

注意事項

タイプ別の目標の設定

地域環境保全タイプ(里山林保全)と森林資源利用タイプの両方を実施する計画の場合、それぞれ対象とする森林や目的が異なるため、それぞれに初回調査、目標の設定、モニタリングが必要になります。

活動実施前の初回調査

今年度初回調査を行う活動組織は、活動を始める前に(既に始めている場合はできるだけ早く)初回調査を行う必要があります。

対象森林が複数箇所に分散している場合

原則、全ての活動地で初回調査、モニタリングを行う必要がありますが、対象森林の状況が同じ場合は、代表的な箇所で調査を実施してもよい。

調査数値の単位

調査結果が実数(本数や材積など)で表される場合、数値が調査区内のものか、ha当たりの数量なのか、対象森林全体の数量なのか、単位を明記してください。できるだけ併記することが望ましいです。この手引きの中にも関係する各ページに注記してあります。

モニタリング結果報告書の記載例 (1)

(様式第 19 号)

平成 30 年度 モニタリング結果報告書

活動組織名 ○○森林愛護組合

1 活動の目標

間伐遅れのため過密となり、かつ台風の被害を受けた対象森林について、
風倒木を処理した後、間伐を実施して適正な林分密度にする。
数値目標 対象森林内の枯損木、傾斜木、風倒木をゼロにする。
3年後の相対幹距比 $Sr=○○$ を目標とする。

「活動の目標」には必ず
数値目標も記載する。
活動計画書に記載したこ
とと同じことを記入します。

2 活動実施前の標準地の状況 (平成 29 年度)

標準地の状況を記載	標準地 (100 m ²) 内の風倒木は○本
	1ha 当り推定○○本
	対象森林全体では推定○○本
	同じ標準地の相対幹距比 $Sr=○○$

写真



29年度に初回調査、活動1年目の調査を実施した活動組織は、その様式をそのまま活かして活動2年目以降を記入していきます。

3 活動1年目の標準地の状況 (平成 29 年度)

標準地の状況を記載	風倒木処理を先行して実施し、すべての処理を完了。一部の支障木を伐採したが、間伐はほぼ未着手。
目標達成度	風倒木処理は100% 間伐は0%
次年度に向けた改善策	風倒木を処理して安全に作業できるようになったので、目標の林分密度を目指して間伐を進める。

写真



数値目標の達成度がわかるように記載します。

4 活動2年目の標準地の状況（平成30年度）

標準地の状況を記載	当初設定した標準地は間伐を完了し、 $Sr=〇〇$ 対象林分全体では目標の相対幹距比を達成した区域は約〇〇haで全体の50%
目標達成度	間伐 50%
次年度に向けた改善策	当初の標準地では目標を達成したので、未達成のエリアに新たに標準地その2を設け、引き続き間伐を進める。 標準地その2（100㎡）の相対幹距比 $Sr=〇〇$

写真



2年目の活動が終了して、年次調査を行ったら、その結果を記入します。

5 活動3年目の標準地の状況（平成〇年度）

標準地の状況を記載	
目標達成度	
次年度に向けた改善策	

写真

ここは来年の活動が終了してから、最終の年次調査を行って、その結果を記入します。

（注）目標の設定及び標準地の状況の記載については、別に定めるガイドラインを参考とすること。

モニタリング結果報告書の記載例（2）

（様式第 19 号）

平成 30 年度 モニタリング結果報告書

活動組織名 ○○○森の会

1 活動の目標

ササを刈り払い、トドマツを植栽して、森林を復活させたい。
 数値目標 3 年間の植栽面積 ○○ha
 1ha 当りの苗木の活着本数 ○○本を目標とする。

3年後の数値目標を記載します。
 数値目標が、1haあたりのものか、対象森林全体のものか明記してください。

2 活動実施前の標準地の状況（平成 29 年度）

標準地の状況を記載	立木はなく、区域全体がササと多年生高茎草本に覆われている。
-----------	-------------------------------

写真



3 活動 1 年目の標準地の状況（平成 29 年度）

標準地の状況を記載	植栽予定地○ha のうち、約 30%にあたる○ha に○○本を植栽を完了。 標準地（100 m ² ）の活着本数○本（1ha 当り○○本）
目標達成度	30%
次年度に向けた改善策	引き続き残りの区画に植栽を行う。

写真



調査結果が、調査区（標準地）のものか、1haあたりのものか、対象森林全体のものか明記してください。
 できれば併記するのが望ましい。

4 活動2年目の標準地の状況（平成30年度）

標準地の状況を記載	植栽予定地〇haのうち、約70%にあたる〇haに〇〇本を植栽を完了したが、初年度植栽の標準地は一部枯死して活着本数〇本（1ha当り〇〇本）
目標達成度	65%（枯死分を勘案）
次年度に向けた改善策	引き続き残りの区画に植栽を行うとともに、一部が枯死した区域に補植を行う。

写真



数値目標が達成できなかったり、後退した場合は、その原因を分析し、次年度に向けた改善策を考えます。

5 活動3年目の標準地の状況（平成31年度）

標準地の状況を記載	
目標達成度	
次年度に向けた改善策	

写真

数値目標が達成できなかったことを理由に交付金の返還を命ぜられることはありません。結果を科学的に評価し、次の対策を考えることが重要です。

（注）目標の設定及び標準地の状況の記載については、別に定めるガイドラインを参考とすること。

モニタリング結果報告書の記載例（3）

（様式第 19 号）

平成 30 年度 モニタリング結果報告書

活動組織名 ○○○里山林活用プロジェクト

1 活動の目標

広葉樹の里山林を毎年少しづつ伐採し、薪として活用する。
年間木材利用量 ○○立方メートル

2 活動実施前の標準地の状況（平成 30 年度）

標準地の状況を記載	○○や△△を主体とする天然 広葉樹林。 標準地（100 m ² ）の林分幹 材積○○立方メートル 1ha 当り○○立方メートル 対象森林全体では○○立方 メートル
-----------	--

写真



3 活動 1 年目の標準地の状況（平成 30 年度）

森林資源の利用状況 標準地の状況を記載	対象森林全体を対象に弱度 の間伐を行い、○○立方メ ートルを薪の原木として利 用した。
目標達成度	70%
次年度に向けた改善策	当初の年間木材利用量の目 標では 3 年後に過伐状態に なる恐れがあることが判明 したので、年間木材利用量 の目標を△△立方メートルに 修正する。

写真



資源利用タイプの場合、
初回調査は立木幹材積
を調査しますが、数値目
標、年次調査は年間木
材利用量になります。
調査の内容が違うので
注意して下さい。

報告書の様式には「標
準地の状況」と記されて
いますが、資源利用タ
イプの場合、標準地か
ら伐採・搬出した木材
の材積を特定するのは
困難なので、対象森林
全体での木材利用量の
調査として差し支えあり
ません。

科学的な森林づくりはおもしろい！



よい成果を期待申し上げます。